



ることに触れ、魚と人間とが関わる場の存在が問われた。さらに、ナマズを食べる文化と食べない文化が指摘された。すなわち、ここでは地域毎の文化の多様性が強調されている。このような地域性の重視は、地理学的視点と通じるものである。

第1章「ナマズ紳士録—ナマズ類にみる多様性」(小早川みどり・系統分類学)は、生物学からナマズの種類を検討することで、ナマズは多様であり分類学的に不明な点が多いことを指摘している。第2章「ナマズの東進と人間活動—遺跡の魚類遺体から—」(宮本真二・自然地理学)では、「東日本にナマズはいなかったか?」という疑問に始まり、日本における鯰の分布とその変化が考古資料や文書類から歴史的に捉えられている。その結果、江戸後期以降のナマズの東進は人為的なものであり、東北地方への水田稲作展開と関係することが浮かび上がってくる。ここでは、外来種などの移入種が地域固有の生態系に影響することも暗に指摘されている。外来種の問題は、琵琶湖における大きな課題のひとつである。第3章「琵琶湖産二種のナマズ報告の思い出」(友田淑郎・魚類形態学)は、ピワコオオナマズを発見した折の話であり、第4章「文化のなかのナマズ—メコンとニューギニアの事例から」(秋道智彌)では、タイ北部のメコン川流域、ならびにパプアニューギニアのレークマレー地域におけるさまざまな人間とナマズとの関わり方が紹介された。そして、その関わり方のなかにある歴史・地域・文化、あるいは政治・経済を総合的に捉える必要性が述べられた。続く第5章「ナマズはどのように描かれてきたか?—本草学から鯰絵まで」(北原糸子・災害社会史)、第6章「如拙

筆『瓢鮎図』の推理」(吉野裕子・民俗学)では、ナマズの描かれ方を通して、人間が社会のあり様をどのように考えていたかを考察されている。そして、社会の歪や生き方の教訓などが読み取られている。

第2部「田んぼとナマズ、そして人」は、4章と総合討論から成る。第1章「ナマズはなぜ田んぼをめざすのか」(前畑政善・魚類繁殖学)では、4月下旬～5月上旬にかけて田植えが始まると、田んぼに侵入して産卵するナマズの行動の謎が解き明かされる。そこでは、湖水位の上昇がいわば琵琶湖の岸辺と化す田んぼを利用した、ナマズの巧みな生存戦略が浮かび上がってくる。ナマズをはじめとする琵琶湖の魚類、さらにヒトも含めた湖の周囲の生物の保全には、田んぼや湖岸のエコトーンの保全・修復が欠かせないのである。第2章「漁・食・祭」(安室 知・民俗学)では、田んぼで行われる水田漁撈が紹介される。この田んぼで魚を捕る行為には一種の娯楽性が含まれ、単調な稲作作業の間の遊びのような存在であったことが述べられている。第3章「水田漁撈は消滅したか?—水辺の遊びにみるホリとギロ(ン)のムラの過去と現在」(牧野厚史・環境社会学、大塚泰介・生態学、矢野晋吾・環境社会学)は、第2章で述べられた水田漁撈がいまや消滅したのか否かについて、守山市の木浜(このはま)で行ったアンケート調査から検討している。まず、この章では稲作の効率化が水田＝稲の単作地とし、農業を通じて漁撈を「楽しむ」営みを奪うものであったことが指摘される。しかしながら、圃場整備や湖岸の埋立てにより地区の景観は大きく変化したものの、これらとは関係なく魚を捕り続ける人がいることが明らかとなっ

た。そして、今後の水辺と水田のあり方を考えていくうえで、この水田漁撈の経験が重要になることが推察された。第4章「ナマズ、そして農民と湖、漁民と水田」(大槻恵美・社会地理学)は、マキノ町知内や沖島での調査を基に、岸辺の環境と人々との関係を考えるうえで、水田で魚を捕る農民にとっての湖、湖で漁をした漁民にとっての水田、それぞれの意味を時間をかけて掘り出すことを提案した。

本書のナマズと人間の関わりから、地域毎に培われた文化の多様性、さらに田んぼという人工的空間の環境利用の多重性を問うことから、それを巧みに利用するナマズと人間の営みが明らかとなっている。一つの空間がもつ多様な意味の解釈に対して地理学的視点を加えれば、より具体的な利用法が明らかになると考えられる。そして、地域性の重視は、地理学からの環境問題への取り組みと関わる問題でもある。

以上の研究結果をふまえ、総合討論「鯰からみた田んぼのゆくえ」が記されている。ここでは、琵琶湖岸で暮らす人々が、琵琶湖総合開発、土地改良や圃場整備など水田をめぐる環境の変化に対しどのように考えているのか、農業や水産業に関わる行政者と生活者、さらに研究者を交えた議論が展開されている。しかし、様々な立場から意見が出されたものの、ナマズ、琵琶湖、田んぼ、そして人間の将来的な関わり方についての明確な答えは出されていない。それは、地域環境問題そのものが、利害関係の絡み合う複雑なものであるためである。とはいえ、この取り組みの大きな評価は、生活者、行政そして研究者が、博物館を通して一同に会し、圃場整備や内湖

埋め立ての問題を議論したことである。それは、討論において司会者の「人と人との関係、魚からみた水域と陸域との関係、さらに人間と魚類との関係が地域の生活としてはひとつのつながりのものであるという視点は、琵琶湖のまわりの田んぼのゆくえを考える出発点となりえる」(214頁)という言葉に表れている。今後は、その困難を乗り越え解決策が導かれてこそ、互いに議論を組み交わした意義が評価されるであろう。

琵琶湖博物館は、ナマズならびに湖岸に暮らす人々の生活の調査を行ない、その成果を一般に公表してきた。それは行政による圃場整備や護岸工事という行為が、琵琶湖の生態や文化にいかなる影響を与えたかを指摘するものであった。すなわち、同博物館は行政機関のひとつでありながら、行政の政策に意見するという中立的な存在である。しかし、この立場が今回の行政—市民という対立するもの同士を取り持つ役割を果たしたのではなかろうか。近年、博物館のあり方、研究と社会との関係が問われている。博物館の多くは公の機関である一方、一般市民と交流し研究成果を活かして行政に意見する立場である必要が求められる。環境問題をはじめとする社会問題に対し、博物館はいかに対応していくのか。本書はこのような課題も問いかけている。さらに、本書の多様な文化・地域性への着目は、地理学から環境問題にアプローチする際の一つの視点として参考になるであろう。

ナマズは、環境をテーマとするあらゆる学問分野間を自由に泳ぎまわり、さらに生活者や行政にたどり着いた。今回、結論は出されなかったものの、同博物館の試みは地域の生活者にとってよりよい生活を実現するための

一歩として評価されよう。ナマズに教えられることは予想以上に多いことを、読者は本書

を通して知ることになるであろう。

(立命館大学・院 赤石直美 記)